

フラナリー・オコーナーの小説

上　野　直　蔵

異色の作家フラナリー・オコーナー (Flannery O'Connor) は1925年アメリカ南部のジョージア州に生れ、ここに育ち、二つの長篇と30の短篇小説を残して一昨年 (1964) 39才で早逝した。彼女は真しなローマ・カトリック教徒で、その信仰が作品の強いささえとなっている。

彼女は自らの小説を喜劇だという。喜劇にしては、恐ろしく痛烈な諷刺と烈々たる魂の叫びにみちている。喜劇ではある。しかもジョージア州のどろくささにみちた喜劇だ。ジョージアの心理的風土の中に育った白人や黒人が、その土地の方言をしゃべりながら愚行を展開する。オコーナーはその喜劇にグロテスクな味わいをつけ、また、その動作を描いては、まるで機械人形のような印象をあたえる描写を用いている。で、その作品はあたかも滑稽でグロテスクでしかも恐ろしい人形劇のような感じをさえあたえる。グロテスクで恐ろしい人形劇という傾向からすると中世の教訓劇を思わせるのである。

たとえば、短篇の「善人はなかなかいない」“A Good Man Is Hard to Find” では、おばあさんがこの人形ぶりで描かれている。この「いわゆる善人」である。おばあさんは作者のよく用いる「やがてその自己満足の人生観を根底からゆすぶられる」人物のタイプの一つである。彼女はドライブの途中で殺人狂につかまると、彼を説得しようとして、しゃべりまくるが、その甲斐もなく殺されてしまう。その死体は「子供のように足を組んで坐ったまま血だまりの中に半ば倒れていた。その顔は笑みを浮べて雲一つない空を見上げていた。」まるで人形のように。

長編の「ワイズ・ブラッド」(Wise Blood) においても主人公のヘイゼ

ル・モーツが汽車に乗っていたとき、「まるで背中の胴のあたりにロープをつけて、汽車の天井からつるされているよう」にして車掌に通り路をあける。あやつり人形のように、この主人公に対するわき役として登場するイノック・エメリイは、ヘイゼルのようにキリスト教に反抗して「無にたいする信仰」を叫んだりはしない。キリストに代る何かの信仰対象を発見できると信じている。その結果発見した異教の神というのは動物園のなかの博物館に収められている人間を骨ぬきにして干し乾した高さ一メートルほどのミイラである。このミイラは人間の無生物化を表象している。「生けるキリスト」ではなくて、魂のない、土ぼこりの詰ったミイラを彼は神と誤認したのである。この神は彼の期待を裏切った。憤怒のあまり彼はそれを説教師の娘、サバスの手中へ投げこむ。しかしサバスはこのミイラをベビー人形のように腕にかかえこんで、あやす。ここにも人形ぶりがみられるではないか。

“The Life You Save May Be Your Own”では、田舎の婆さんが旅まわりの行商人に自分の白痴の娘をおしつけて結婚させる。その三十娘は「短い青色のオーガンデイの服をきた大柄な娘」であるが、「ひどく前のめりになって、ほとんど両膝の間に頭をつっこんで」彼を見ていたが、突然ドサッところがり落ちて、小さな泣き声をたてはじめる。言葉もしゃべれないほどの白痴である。この娘と古自動車とを抱き合せてもらった彼は、娘を途中で置きざりにして、自動車だけものにして逃げて行く。娘はドライブ・インで食事をした後そのままグウグウ眠ってしまう。この娘の読者にあたえる印象はピンク色の頬をしたベビー人形である。しかし、かわいとか、楽しいという印象ではない。

「人形ぶり」を使ったことには二つの意味がある。一つはあやつり人形的なものの与える喜劇的でしかもグロテスクな効果、もう一つは魂のない存在として、現代の精神的荒廃にある人間の状態を表象する。ここでわれわれの思い出すのは、サッカレーが「虚栄の市」で、すべての登場人物を

作者の手にあやつられるあやつり人形として提示したことである。サッカレーもやはり諷刺作家であった。彼は小説を人間そのものの描写のために書いたのではなく、自分の主義主張の伝達的手段として書いている要素が多い。ただ「虚栄の市」の場合に、サッカレーは一つのアイディアの表現の手段としてベッキー・シャープをつくって、やがて、そのベッキーがあたかも作者の意図を無視したかのように血と肉のある一つのすばらしい人間像になってしまうのである。

しかしながらオコーナーの小説をちゅうちょうなく喜劇とよぶことができるだろうか。彼女自身が自らの小説を喜劇とよんでいようと、その喜劇的要素は普通の意味のそれではない。すぐれた喜劇というものは、人間の笑いに耐えた愚行をえがきながら、これらの人物を愛と寛容とでつつんでいて、読後の印象が温かく楽しいものである。ところが、彼女の作品においては愚行にたいする批判は刃の如くするとく、真理を志向する執念は狂気のように烈しく、一刀両断に世俗を切りつらぬく逆説法にこもる怒りはあらあらしく、読者は批判のまが自分たちに向けられていることを知って、おののかざるをえない。その上、恐ろしくスピードのある簡潔な表現は作者の意図をそんたくすることのむつかしさを覚えさせる。作者の諷刺のするどさのゆえに、われわれは時代と風土こそ異なるが、スウィフトを思い起し、また、その「まことのキリスト」への志向のはげしさの故に、アウグスチヌスをさえ思う。ただ、小説としてはこれほど難解であることが許されるであろうかという疑問がのこるのである。彼女ほど作中の人物事件について、ヒントとなるような解説をあたえず、つっ放した書き方をするひとと珍しいであろう。その逆説にしても、「これは逆説ですよ」という意味の手がかりになる言葉もあたえずに、読者の前にほうり出してみせるものであるから、作者の意図を推測するのに苦心しなければならない。これらはすべて程度問題でもあろうが、これほどまでに意図をあらわにしないことが良いことであろうか。このことは多くの彼女の短篇につい

とも言えることである。

短篇にひきかえて二つの長篇小説「ワイズ・ブラッド」および「はげしく攻むるものはそれを奪う」(*The Violent Bear It Away*) にあってはその意図をうかがうのが比較的やすいである。ここに「ワイズ・ブラッド」を中心として、そのテーマと創作のモチベーションを論ずることとしよう。

オコーナーはこの「ワイズ・ブラッド」の序文で次のように語っている。「ある人々にとってはキリストを信ずるか否かは生死の問題であるが、このことを重大問題だと考えたくない読者にとっては、それが（この物語をよむ上での）妨げになるだろう。こういう読者にいわせば、ヘイゼル・モーツが彼の頭の奥ふかいところで、木から木へと伝い飛んでいる瘦せこけた人物から一生懸命に逃れようとしたところに、彼の正直さがあるのだ、という。しかし、作者にいわせれば、逃れおおせなかったところに、彼の正直さがあるのだ。『……ができなかった』から正直だということがあるだろうか。私は大抵の場合そういうことが言いうると思う。というのは、自由意志というものは単一の意志ではなく、一人の人間の心の中で互に矛盾する多くの意志であるから。自由は単純に考えることはできない。自由の問題は謎であって、小説も——喜劇小説でさえ——それを（解明するのではなく）ただ深めることができるだけである。」ヘイゼル・モーツが兵役をすませて、都会行きの汽車にのっているところから小説ははじまり、彼の死によって終っているが、描かれた物語は彼のキリストとのたたかいである。彼は除隊の際支給された僅かの金で買った暗青色の背広と黒い帽子という身なりであるが、この帽子のために彼はどこへ行っても牧師と間違えられる。このことは彼が一種の宗教家であることを暗示している。

一体にオコーナーの小説は求道者を扱うことが多い。その求道者というのはわれわれが普通考える意味のものではない。オコーナーの求道者はキリストに反旗をひるがえしている求道者である。彼らは教会を焼きはらい、

罪のないものを殺す。しかも物語の終りに読者は「この殺されたものは本当に罪がなかったのだろうか」という疑問につきあたる。あるいは「この教会はやきはらった方がよかったのではないか」と感じ、やがては、自分たちの平穩無事な生活が果して罪のないものであるか、という疑問を起すこととなる。その例を前出の“A Good Man Is Hard to Find”にもとめてみよう。ある晴れた日のこと、夫婦しておばあさんと三人の子供をつれてドライブに出かける。途中で脱獄囚に出あい、みなごろしにされてしまう、という短篇であるが、その序文にエルサレムの聖シルルの言葉、「竜は路のかたわらにあって、通行人を見張る。竜の餌食とならぬよう注意せよ。われわれは魂の父のもとへおもむく。しかしそれには竜のそばを通りぬけて行かねばならぬ。」が引用されている。この短篇のなかでは、殺人犯が竜なのであり、主人公のおばあさんはこの竜に食べられてしまったのである。何故？ そしてこの竜とは何であろうか？

この問いにたいする答として犯人の言葉に注目しなければならない。おばあさんが犯人にピストルで射たれる直前に、この二人の間にはキリストに関して問答が交わされる。まず、おばあさんは「あんたは良い人に違いない。下品な人間ではない」といって殺人犯を懐柔しようとする。犯人は自分の過去を語りはじめる——父親は「お前は兄や姉とまるで違う。お前だけがぐれる」といった。それから何をしたか忘れたが——父を殺したんだと検事はいうが、自分はそれもはっきり覚えていない——ともかく刑務所に入れられて、壁の中で何年かを過した——と。おばあさんは「神に祈りなさい」と繰り返す、ついに「エスさま」と叫ぶ。その「エスさま」を聞いて、犯人の独白がはじまる。「エスのおかげで世の中はひっくり返ってしまったんだ。エスだけが死者をよみがえらせたのだ。エスがそんなことしなければよかったのだ。エスのおかげで世の中がひっくり返ってしまったんだ。もし本当にエスが死人をよみがえらせたのなら、われわれはすべてを捨ててエスに従えばよいのだ。もしエスが死者をよみがえらせな

かったのなら、われわれはこの世をただ楽しんだらよいのだ——誰かを殺すとか、誰かの家を焼くとか、意地の悪いことをするとか——俺はエスが死者をよみがえらせた現場にいなかったから分らない。現場に居あわせればよかった。そうしたら、はっきり分って、俺は今のようにはないなかったろう。」と殺人犯はいうのである。この独白は彼（竜）が何んであるかを示すものである。つまり、彼の言葉は「神は存在するのだろうか、存在しないのだろうか。存在しないのならば、われわれは何をしてもかまわないのだが」という、ひたむきな求道をあらわしている。神があって始めて行為としての罪惡が生れてくるというキリストの教義を示している。これはドストエフスキーの小説のテーマでもある。たとえば「罪と罰」の主人公は同じ間を通じて、神は存在するという答に達した、「ガラマゾフの兄弟」の二番目の息子も同じ間をしている。

一方、おばあさんの態度は「いのりなさい」と他者に向っている。真に敬けんな人ならば他に対して「いのりなさい」という前に、はたして自分自身は祈っているのだろうか、という自己批判があってしかるべきである。他にたいして「いのりなさい」という前に「私はいのります」という態度があるべきものなのである。このおばあさんは勇敢ではあるが、思い上がったおごなりクリスチャンである。「あんたは善人にちがいない」という言葉は自分の命を助けたいあまり出たもので、実はそうは思っていない。このように形ばかりのクリスチャンで真に神にたいする謙きよさを忘れた人たちに向って、その自己満足を破るものが竜である。はげしく、みにくく、赦しゃのない「真理探求」の竜である。「善人」という言葉は、ここでは皮肉なふた通りの意味をもっている。一つはおばあさんのいう「善人」で、それは常識的な意味の「善人」である。おばあさんが殺人犯に「あなたは善人にちがいない」といったとき、それは人殺しなどしない人という意味であって、こういいながらおばあさんは心の底では彼を善人だとは信じていない。もう一つは、案外、この犯人は「キリストを求める」真の善人で

あるかも知れないということである。恐ろしい竜ではあるが。

オコーナーの小説にはこの種のテーマがくりかえされている。真の信仰をもたず、しかし一応は教会生活をして、立派なクリスチャンだと自負している人間（多くの場合、中年の主婦）がある日、突然この恐ろしい「真理探究」の竜に出あう。そしてある者はこのおばあさんのように、竜に食い殺されてしまうし、また “Everything That Rises Must Converge” では人種差別をする母親が、はげしくそれに反対する息子（竜）に攻撃される。一方、ある者は竜に出あった結果として一段高い精神的成長をとげる。たとえば “Revelation” では農場を経営している中年女が歯科医の待合室で黒人の怠けぐせを非難している時、たまたま側にいた女子大学生（竜）にかみつかれる。それによって中年女は天啓をみる。

オコーナーの作品には常に「真理とは何か、悪とは何か、存在の悪とは何か」というはげしい問いかけがある。人間の愚かさにはたいする怒りがある。「いわゆるクリスチャン」の自己満足にたいする皮肉は痛烈である。容赦なく偽善をあばく。「竜」は偽善をあばく刃であるが、「善」の形をとってはならず、むしろ「悪」の形をとっている。「ワイズ・ブラッド」の主人公ヘイゼル・モーツがこの竜の一種である。彼には説教師の祖父があった。この祖父はアメリカ南部に多いファンダメンタリストであるらしいのだが、南部諸州をとび廻って人々にキリストの救いを説いた。「祖父は群衆に向って、お前方は石ころ同様だ、と説いた。『その石ころ同様の お前方を救うためにエスは死に給うたのじゃ。エスはお前方の魂がほしいあまりに死に給うた。万人の命に代ってこの方お一人の命を捨て給うた。ただ一人のためにも死に給うただろう。お前方、分かるか？ お前方の一人のこの石ころの魂のために、エスは一千万べんも死に給うというお思召であったのじゃ。そのみ手とみ足をお前方の一人のためにすら一千万べんも釘づけにされてよいと思召したのだ。（老人は孫のヘイズを指さした。祖父はこの子が特に嫌であった。というのは、この子の顔はまざれもなく

自分の顔そのままであって、それはいつも自分にたいする嘲笑のように思われた。) このガキのためでさえ、あそこに立っている、汚れた手を両側でにぎりしめたり開いたりしているあのつまらぬ、罪深い、分別もない男の子のためでさえ、エスはその子の魂を救わんがためには一千万べんも死に給うという思召しじゃ。エスはこのガキを罪の海の上を追いかけて下さるのじゃ。あの男の子は救われたのじゃ。エスはもうこの子を放し給わぬ。救われたことを決して忘れさせぬ。この罪人は己れはのがれたと思うだろうが、ついにはエスとはえ給うのじゃ。」と説いた」この迫力とスピードをもつ言葉は狂信的なファンダメンタリストのものであって、一見キリスト教の教義を説いているようでありながら、真のキリスト教から外れたものである。どのように外れているか、作者は作品の中でそれを明白には説明していないが、これが主人公ヘイゼルが後に唱える「キリストなき教会」という旗印を立てる動機になっていること、さらに彼がたえず「自分は救われたくない」と主張していることの原因となっている。

では、何がヘイゼルをしてそれ程までに反逆させるのか。真のキリスト者は他をさして「お前のようにつまらぬ者でさえエスは救い給うた」とは言わない。キリスト者が衆に向っていいうる唯一のあかしは「見よ、私のようなつまらぬ者でさえエスはあがない給うた」である。しかし祖父はヘイゼルを指して「お前のようなつまらぬ者の魂をさえエスはあがない給うた」という。そこでヘイゼルはそのエスから逃れたいと望む。エスから逃れ、あがなってほしくないという必死の主張がこの物語のテーマとなっている。彼は都会に出て「キリストなき教会」をつくろうとして説教してまわる。「もし君たちがあがなわれたのなら、あがないのことを心にかけるだろうが、事実は君たちは気にしていない。君たちの心の中をしらべてみ給え。あがなわれなかった方がよかった、と思っているかどうか考えてみ給え。あがなわれた者には平和がない。私は平和で満足のあるキリストなき教会を説く。」「真理はどうでもよいのだ。もしエスが君たちをあがな

ったといって、それがどうしたというのだ。別にどうということもないではないか。顔があちこちと動くわけでもないし、三つの十字架の一つにエスがかけられたからといって、その十字架が他の二つよりも尊いというわけでもない。われわれにはキリストに代るものが必要なのだ。すっかり人間であって、むだに流す血のない何かが必要なのだ。」「手でふれることも、目で見ることも、歯でかんでみることも、できないものを信ずるなどは馬鹿げている。自分は数日前までは瀆神行為がよいと考えていたが、瀆神行為そのものが何か汚すべき対象を認めていることになるので、これも駄目だ。ベツレヘムに生れ、カルバリイで人の罪をあながって死んだというキリストは全く正気の沙汰では考えられない……云々」

このようにして彼は幼いときに恐怖をもって心に植えつけられたキリストの姿に挑戦する。悪徳行為をおこなう。また彼はある説教師が信仰のあかしとして石灰で自ら目をつぶしたと聞いて驚嘆する。しかしその説教師は実は最後の瞬間におじけづいて、本当に石灰を目にすりこむことができなかったこと、だからその盲目は偽りであることをヘイゼルは発見する。彼は自分がキリストに反抗する行為においてこの説教師に負けないぐらいの勇気があるかどうか、否、この説教師以上の勇気もてるかどうか、キリストに対して反キリスト者の挑戦をする。そして石灰で自分の目をつぶす。

ここまでがキリストに反抗するヘイゼルの姿である。ところが、やがて彼の変身がはじまる。盲目のヘイゼルは苦行者のように胸に鉄条網をまきつけてねるようになる。靴の底に小石を入れて足の裏から血を出しながら毎日何マイルも歩きつづける。風邪をひいて肺炎にかかりながらも、この話には伏線がある。彼は子供のとき祖父に見世もの小屋につれられた際に「子供見るべからず」の小屋にもぐりこんで、ヌード・ショーを見たのであるが、小屋では説教師たる祖父は大いに悦に入ってショーを見ているのである。その帰途、母親に見つかった。母親は彼が何をしてきたのか知ら

なかったが、その罪をかぎつける鋭い嗅覚は息子が何か「汚い」ものにふれたことを感じ、「お前は何を見てきたんだえ。エスはお前をあがなうために死なれたというのに。」という。彼は「あがなってくれと頼んだわけではないのに。」とやり返す。しかしその翌日彼は贖罪のために靴に小石を入れて歩いてみたが、エスは、許したという^じじを見せなかった。大人になったヘイゼルはエスに許されることを求めて苦行僧のように自己を苦しめる。最初猛烈にエスにさからい、後にエスの許しを求めて、子供の時と同じ贖罪の行為をしながら、彼は死んでゆく。彼の最後をみとった下宿屋の女主人は目をつぶると、その脳裡にほんの針の先のような光をみたという。「それは遙か遠くにあって、頭の中にはきりつかむことはできなかった。何処かへ通ずる道の入口をふさがれているように感じた。彼女は目をつぶって彼の目をのぞき込んだ。そして彼女は自分では始められない何物かの始めについに到着したような気がし、また、彼がだんだんと闇の中へ遠ざかって行って、ついに光の一点となるのを見た。」

キリスト教は解釈をあやまれば残酷無慈悲であることを、この物語は説く。祖父や母のように、あらゆるもののをただ罪と罰の観点からみて、他人を裁くような人間をつくり上げる。「自分は罪人だ」とは言わず、他人をつかまえて「お前は罪人だ」という態度をつくる。この意味で世の中で最も邪悪なものは思い上ったキリスト教徒である。しかし、また、ヘイゼルが「祖父の教えたエスでないエス」を求め、まことの真理を求めるようになったのも、やはり、幼い時にエスを教えられたからである。たとえ誤った形であってもキリスト教はキリスト教であった。何かの真理がなくてはならない。何かのエスがならぬ、という観念をたたきこんだのもこのキリスト教であった。彼はついにエスを否定することはできなかった。そして、キリスト教徒として死ぬ。オコーナーの排撃するのは説教師の狂信であり、そして一般キリスト者の思い上りであった。

「ワイズ・ブラッド」はロバート・フィッツジェラルドによれば、実存

主義者にたいするパロディだ、という。確かにその通りである。オコーナーは実存主義に対してクリスチャンとしての解答を出しているのである。その解答とは「人間はしょせん神から逃れることはできない」ということである。

彼女の物語はグロテスクで滑稽で無気味で、虚偽にたいする批判は苛しやくがない。そのイメージは枯れて堅く引きしまって鋭い。しかしながら、彼女自身は *The Living Novel* (ed. by Granville Hicks, 1957) において自分の小説がグロテスクであることを否定する。また、彼女は「ゆがんだもの、不健康なものを書くのはそれがよいと思って書くのではなく、悪いと思って書くのだ」と言い、さらに「ショッキングな描き方をするのは、世の中が間違っただけにたいして鈍感になって、間違っただけを普通のことだと思っているので、そうではないことを示すためには普通的手段では駄目だから」と述べている。事実、世の中で普通のこととして通用している間違っていることども、たとえば、魂の墮落とか偽善とかにたいする彼女の嗅覚は猟犬の如く鋭いものがある。そしてそれが、作品の意図においても、表現においても、伝達が巧みな場合には黙示録的な高さにまで達するのである。

最後に忘れられないことは、彼女の小説がたんなる喜劇でないということである。その人物が志向する切ない真理探求のゆえに、それはむしろ悲劇の様相をおびる。全体のテーマとしては本質において悲劇である。しかも人物は諷刺のためのカリカチュアにとどまらず、あわれで美しい人間の情感をそなえている。たとえば、ミイラを新しいキリストと間違えるイノックは田舎から都会に出てきた十代の少年の孤独をみなぎらせているし、あの狂乱症のような少女サバスでさえ、その悲さんな生い立ち、さては現在のたよりない哀れな生活を思えば、悲しくも弱々しい人間の姿をわれわれは見ると。それは悲喜劇とよぶべきであろう。